

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

國學院大學考古学の創成期：
明治時代から昭和初期まで

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター 公開日: 2023-02-09 キーワード: 考古学史, 坪井正五郎, 高橋建自, 鳥居龍蔵, 樋口清之, 上代文化研究会, 考古学研究室, 自校史, 『國學院雑誌』 作成者: 加藤, 元康 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002035

國學院大學考古学の創成期

— 明治時代から昭和初期まで —

加藤 元康

要旨

本稿は、國學院大學考古学の歴史について扱い、『國學院雑誌』から講師・関係記事を抽出し、その形成過程を考古学史や自校史と比較して、その位置づけを述べた。明治四四（一九一一）年に、本学考古学の最初の講義が高橋健自により行なわれたが、今までの時期について誤認されていた。そこで、明治時代から昭和初期まで、本学考古学の動向について詳細に調査し、整理した。その結果、明治末期には、人類学の講義を坪井正五郎、考古学の講義を高橋健自が担当し、その後、単科大学の認可に伴う学則・諸規制の改正によって、鳥居龍蔵が両講義を担当し、それを画期として、考古学研究室・標本室や上代文化研究会が創設し、同室の整理や同会の遠足会・発掘調査などの実習が行なわれ、現在にも繋がる本学の考古学の組織的教育が確立していたことを明らかにした。

キーワード

考古学史、坪井正五郎、高橋健自、鳥居龍蔵、樋口清之、上代文化研究会、考古学研究室、自校史、『國學院雑誌』

一 本論の視点と資料の収集

平成二三（二〇一一）年四月二十三日から六月四日まで、國學院大學伝統文化リサーチセンター資料館にて、企画展「若木ヶ丘の歩けオロヂー」が開催された。この企画展は、近代的学問の形成過程における本学考古学の位置付けや、様々な試行錯誤を、当時の写真・刊行物や関係者の自筆草稿、出土品などを展示し、同時に、國學院大學所蔵の代表的な考古資料を展観するもので、冊子も作成した¹⁾。この企画展の計画に際して、本学考古学の歴史に関する調査を行ない、本稿では創成期に当たる明治時代から昭和初期までの結果を、考古学史や学校史と照らし合わせて述べる。

この創成期については、明治三十年代に坪井正五郎博士が、考古学人類学を含めた講義を行ない、逝去後、高橋健自に代わり、大正末年に鳥居龍蔵になったと語られ、詳しくは、次のように記載されていた²⁾。

坪井正五郎（理学博士）講師 人類学概論 明治三八年〜大正六年
高橋健自（文博）講師 日本考古学 大正六年〜十二年
鳥居龍蔵（文博）教授（専任） 人類学、人種学、考古学 大正一三年〜昭和九年

以後、本学の考古学の歴史に触れる文章は複数あるが、これらの記載に則っている。これらに共通して認められるのは、講義創設後、ほぼ講師が連続的に変わりつつ、開講されているという点である。しかし、坪井正五郎は、大正二年に現在のサンクトペテルブルグで客死しており、明治四四年発行の高橋健自著『鏡と剣と玉』の肩書きに、「東京帝室博物館歴史部次長」と共に、「國學院大學講師」と書かれていることなど（第一図）、前述の記載との矛盾点が明らかとなり、詳細に調査を行なう必要性が痛感された³⁾。その結果、國學院大學の創成期について新たな知見を得ることができた。最も重要な事は、明治四四（一九一一）年に、考古学講義を高橋健自に委嘱し、本学で初めて

講義が行なわれた事であり、企画展を開催した平成二三（二〇一一）年が、考古学講義開講百年という節目の年であった。

このような新たな事実の発見に鑑み、本学の考古学という範囲の中で、いつ頃、誰が講師であったのか、また本学の考古学研究室・考古学資料館・考古学会などの全体的組織の設立などに関して、関係資料や刊行物の記載内容を整理し、学史や校史的な位置づけを図るのが本稿の目的である。

一つの大学の考古学の動向について、整理することは、自校史的側面と考古史的側面の両方を兼ね備えていると言えるだろう。前者は、自己点検・自己評価という役割があり、大学は、その研究・教育において、どういった役割を果たし、どういう人材を育成し、どのような地域貢献を行なったのかを公開し、さらには、自校史教育、建学の精神などを学ぶことで、「愛校心」や「母校愛」を啓発する事を目的としている⁵⁾。一方、考古学史では、今までの学問研究を冷静に捉えて、批判的に受け止めつつ、新たな学問への基礎を固めるとされ、その捉え方として、①回想、②批判的、③反省的、④無視の四つがあるとされている⁶⁾。①以外は、その研究史や見解についての事であり、本稿で扱うのは①に当たる。その場合、記載事項の検証作業も必要であり、本稿執筆の要因も、この間違いを訂正する視点から記されている。そこで論拠となっている文献を記載するように努めている。

本稿に関する関連情報ならびに資料の収集は、『國學院雑誌』の彙報欄を中心に、同じ時期に発刊された学術雑誌の記事や、より詳細で正確な内容把握のために、自伝についても調査対象とし、記述内容や時期を確認した。また、自校史との関係性を知るために、大学の動向についても校史を参考にまとめたが、詳細については、『國學院大學百年史』や『國學院大學百二十年小史』を確認していただきたい⁷⁾。

二 明治から大正期の考古学関連の講師と内容

(一) 黒川真頼と喜田貞吉

明治十五（一八八二）年に、皇典講究所の開校式典が開催され、明治二三（一八九〇）年に、本所から國學院が設立された。学科課程には、国史・国文・道義・法制・外国史・地理・哲学・漢文・英語・体操が開講され、黒川真頼が当時の講師陣の一人であった。

黒川真頼は、文政十二（一八二九）年、十一月に現在の群馬県桐生市に生まれ、天保十二（一八四二）年に、江戸の国学者、黒川春村の門に入り、その後、慶応二（一八六六）年に、春村の養嗣子となって家学を継いでいる⁸⁾。

明治十二（一八七九）年に刊行された『上代石器考』と『穴居考』が考古学的に知られ、大正八（一九一九）年五月に、開催された考古学会の総会にて、考古学者十二人に選ばれるなど、多くの業績を残している。黒川の明治二六（一八九三）年度の担当科目は「枕草子」であり、明治三九（一九〇六）年の逝去を悼む記事には、その秀逸な講釈に、学生のみならず、講師まで講義に参加していたとあることから、人気の講座であった。講義内容に考古学が含まれていたかどうかは定かではない⁹⁾。

一方、皇典講究所の定期的な講演を掲載した『皇典講究所講演』には、「古代武器説」・「穴居説」などの考古学と関連する黒川の講演がある¹⁰⁾。「古代武器説」の図中には、石剣の種類があり、独鈷石・石棒・石剣のような図が掲載され（第二図）、遺物の知識を混じえた講演であったことが窺える。「穴居考」は古典による考証を中心としているものの、その冒頭の文章には、「古代の人の穴居は山の腹を横に穿ちて窟（ムロ）と為して住せしなり」とあり、埼玉県吉見百穴のような遺跡を指していると考えられる。このような黒川の意見は、坪井正五郎が、横穴を穴居の跡とした論に影響を与えたと指摘されている¹¹⁾。また、『上代石器考』や『工藝志料』に記載されていたアイ

又が石器を用いる事について、坪井が現地調査の成果から批判を行なうなど、考古学の学問形成に、寄与していたことがわかる。明治三九（一九〇六）年八月に、黒川が逝去し、『國學院雑誌』に「黒川真頼先生言行録」が掲載されており、その人物像を知ることができる。¹⁸⁾

明治三二（一八九九）年に、皇典講究所が國學院卒業生に対して、「日本歴史」・「国語科」の教員免許資格を取得させるため、認可申請書を文部省に申請し、認可された。これにより更に中等教員としての実力を向上させるため、学科改正を行ない、講師陣を強化する。そのような状況下の明治三四（一九〇一）年に「王朝時代史」の担当として喜田貞吉が招聘される。

喜田は、明治四（一八七二）年に、徳島県小松島市に生まれ、明治二六（一八九三）年に帝国大学文科国史科に入学し、黒川真頼・栗田寛・小中村清矩・星野恒・三上参次・田中義成などに教わり、明治二九（一八九六）年に、同大学を卒業後、歴史地理を学ぶため、大学院に入学するが、本学講師着任の前年に、早稲田専門学校（早稲田大学）の国史地理の講師を担当し、他学校の講師も兼務していたことから、大学院を疎かにして、指導教授の一人、坪井九馬三から厳しく注意を受けたと回想している。¹⁹⁾ 喜田は「論争考古学者」と称されるほど、神籠石論争や法隆寺再建非再建論争などの渦中にいた。本学の講義内容については、明らかにできなかったが、明治三七（一九〇四）年以降に、専門の研究をしたと喜田自身が述べていることから、これらの論争については、本学で講じられていないと想定できる。

（二）人類学の講義

明治三七年に、本学が専門学校令による学校になり、明治三九（一九〇六）年には、大学部を設置し、私立國學院大學と改称した。明治四十（一九〇七）年に、大学部本科が開講となり、学科科目の変更や講師の移動が見られ、明治四三（一九一〇）年度には、学則を改正し、歴史地理科のうち地理に関する教授時数を減少し、国史国文に関する時数を増加し、新課程を編成して、歴史科と改称した。この年、地理科に人類学の講義が開設され、坪井正五郎

が担当する。²⁰⁾

坪井は、明治十（一八七七）年に、大学予備門に入学し、明治十四（一八八一）年に、帝国大学理科大学に入学し、動物学を専攻する。明治十七（一八八四）年十月には、白井光太郎・佐藤勇太郎・福家梅太郎とともに、人類学会を創設し、人類学・考古学の発展に寄与した。のちに、人類学会の幹事であった三宅米吉と相談し、明治二八（一八九五）年に考古学会が創設するなど、考古学界に大きな足跡を残している。²¹⁾

明治四三年発行の『東京人類学雑誌』には、「國學院大學に於ける人種学講義」という題で、「國學院大學に於ては史学科三年生に人種学講義を聴かしむる事と成り四月以来坪井理科大学教授が出講し居られしが此程結了せしと云う。二十時間足らずの事なりし故、眞の大意たるに過ぎざりし趣なれど諸方面に向かひて人類学的知識の普及し行くは誠に喜ばしき事と云ふべし」とあり、その年の事業報告には、人類学に関係ある講義が開かれている場所として、東京帝国大学理科大学・文科大学、早稲田大学、華族人類学談話会、東京裁縫女学校（東京家政大学）とあり、國學院大學でも時期を限って人種に関する講義が催される事となった、とある。²²⁾

坪井は、大正二年に、学士院万国連合に参列するため、現在のロシア連邦共和国サンクトペテルブルクに赴き、急性腹膜炎で逝去した。本学での坪井の講義は、出発の前週まで続いていた。坪井の葬儀には、大学を代表して、石川岩吉が会葬している。

坪井の死後、その年から、人類学講義は、松村瞭が引き継いでいる。²³⁾ 松村瞭の父、任三は、帝国大学の植物学の教授で、その同僚であった坪井正五郎の勧めで、明治三三（一九〇〇）年に、帝国大学人類学選科に入学し、卒業後は、人類学教室に留まって研究生生活を送っていた。²⁴⁾ 國學院大學で人類学の講義を行なったのは、人類学教室に留まった時期である。『國學院大學百年史』には、「大正六（一九一七）年九月には、学則の改正に伴い地理科の横山又次郎・松村瞭・寺崎留吉の三講師が休講」とある事から、長くとも大正

五年度までと思われる。ただし、大正三年の学科目には、「人類学」がない事から、不定期的な開講であったかもしれない。

(三) 最初の考古学の講義

坪井正五郎が、人類学講義を担当した翌年の明治四四年、高橋健自が、國學院大學の考古学の担任を委嘱される。現在の東京大学に考古学の講義が開講されたのは明治四二年であり、坪井正五郎が担当した。京都大学では、大正二年頃から考古学の講座が開かれたとあることから、日本の大学の中でも早い段階における開講といえる。

高橋は、明治四(一八七二)年に、宮城県仙台市において仙台藩士・高橋章俊の長男として生まれ、明治十二(一八七九)年頃に、中教院で学んでいる。皇典講究所が明治十五年に設立されると、中教院に宮城県分所が置かれている。明治二四(一八九一)年に、東京高等師範学校に入学し、卒業後、中学校教諭となり、明治三十(一八九七)年に、奈良県尋常中学校教諭となり、畝傍分校(のちの畝傍中学校)に勤務する。のちに、畝傍中学校を卒業した樋口清之は、同中学校の教員経験のある高橋健自の自宅まで数度訪ねており、これを高橋は温かく迎えた。同じ中学校を卒業した樋口の先輩、森本六爾も高橋宅の近くに住んでいた。高橋は、明治三七(一九〇四)年に、東京帝室博物館学芸員となり、東京師範学校時代に教導を受けた三宅米吉を補佐し、歴史部次長となった。

当初、考古学の講義は、単年度開講を予定していたようである。しかし、生徒の希望で三年つづけて講義があったという。いつ頃まで、講義があったのかどうか定かでないが、大正四年度までの学科目と担当者として名前が掲載されている。

大正七年度に、大場磐雄が入学するも、その手記『楽石雑筆』には、高橋健自の本学での講義に関する記載はないことから、その頃までには、休講もしくは、閉講になっていた可能性がある。『人類学』を坪井正五郎や松村瞭が担当し、「考古学」を高橋健自が担当していたが、大場が入学した頃には、

本学に人類学・考古学の講座は開講されていなかった。

遡って、明治四二年十一月二十八日、本学講堂にて国史学会の開会式が行われ、その参列者の中には、喜田貞吉や高橋健自の名前があり、高橋が講師となる以前に、多少なりとも本学と接点があったことを窺い知ることができ

三 上代文化研究会と考古学研究室

(一) 鳥居龍蔵と上代文化研究会の創設

大正九(一九二〇)年三月、単科大学として大学令に拠る認可の見通しがつき、それに伴って学則・諸規程が改正された。学則の第十条の開設する講義・演習には、甲乙丙があり、三学年間に一回開設する丙種には、考古学(一)、人類学(一)とあり、正式に学則に記載される講義となった。これらの講座を担当したのが、鳥居龍蔵であった。

鳥居は、現在の徳島県徳島市に生まれ、坪井正五郎を師事し、帝国大学人類学教室標本整理係、助手、講師を経て、大正十一(一九二二)年に帝国大学助教となり、同時に本学の講師も委嘱された。大正十一年三月二二日に講師室で行われた本学最初の教授会でもある学部教員会議に参加し、列席名には「鳥居龍蔵の博士たち」と記されていることから、鳥居のみではないと考えられる。鳥居の手記によると、当時の國學院大學学長であった芳賀矢一の請いにより講義をしたとあり、明治三五年頃に、芳賀の「日本国民伝説誌」を通年受講し、二冊の講義ノートを作ったとあることから、こういった関係も一つの要因であったと考えられる。その他、埴瑞比古が招聘に尽力したとの話もある。

最初の担当科目は、人類学で、大正十二年度に教授となり、考古学を担当した。大正十一年の『人類学雑誌』には、「久しく中絶して居た國學院に於ける人類学は今度同大學の学制改正によって再び設置せらるる事となり、本

学部鳥居博士に該講義を委嘱し本月新学期より開講することとなった」と伝え、翌年には「兼ねて國學院大學に講師たりし鳥居博士は先頃同大学教授として就任さるる事となりたるが目下の担任学科は考古学にして最近移転したる渋谷の新築校舎にて一週一回木曜日に開講。恰も先史考古学の部分の講義にて欧州のバイルドウエリング、ピートモス、マガレモス等に関し講述せられつつありと云う」と内容を記している。その後、大正十四年度は、人類学、大正十五年度は、人類学（新石器時代）・人種学概論、昭和三年度・昭和四年度は、人類学・考古学、昭和五年度は、考古学、昭和六年度は、考古学・人類学、昭和八年度は考古学概論（日本周囲の石器時代に及ぶ）を担当した。本学において鳥居を語る際に忘れてはならないのが、上代文化研究会（國學院大學考古学会）の創設である。この創設には、諸説の時期があり、平成二三年の企画展『若木ヶ丘の歩けオロヂー』の開催中においても、判明しておらず、暫定的に大正十三年頃と表記した。しかし、鳥居が関係した文献を精査しつつ、再度、『國學院雑誌』を紐解いていくと、「上代文化研究会発会式」という記事があり、次のような発会式を開催していた。「國學院大學内に上代文化研究会生る。大正十五年一月十三日（土）午後一時より国史研究室に於て発会式を行う。筆頭開会の辞を幹事宣す。会長鳥居龍藏博士演壇に立たれ上代文化研究について博士独特の熱弁を振う。会するもの数十名、盛會を極めた。本会は会長鳥居龍藏博士の下に幹事長小松真一君及幹事数名あり。幹事瑞比古君、松本勝己君、高橋秀治君、松田茂穂君等重に幹事の勞をとらる。最後に本会も将来益々多幸盛大ならん事を祈る」とある。この時の鳥居の熱弁は、昭和四（一九二九）年発行の『上代文化』第二号に掲載された「上代文化研究法に就いて」と思われ、民間伝承学・童話及び神話・古典の研究・考古学・土俗学・美術史学（歴史考古学）など偏らない研究と、周辺諸国を含めた研究を目指すように述べている。また幹事の一人である瑞比古は、大正十一年から茨城県笠間稻荷神社の社掌を行いつつ、大学に通い、鳥居を大学に招聘することに尽力し、また畷傍中学校在学中の樋口清之

とも交流があり、鳥居とともに、樋口が本学に入学する動機となった人物である。のちに、神社関係機関の要職に付き、茨城県の文化財にも尽力している。

上代文化研究会の創設は、鳥居が会長であった武蔵野会発行の『武蔵野』にも掲載され、大正十五（一九二六）年六月六日に、埼玉県吉見百穴や大宮氷川神社に遠足会を催す予定と報じている。上代文化研究会の例会に関する『國學院雑誌』の記事にも遠足会に関する同様な記述がある。例会は、同年十月九日、午後二時半から午後五時半まで、国史研究室で開催され、鳥居や大場磐雄とともに、佐伯敬紀や福田耕二郎ら、東京農業大学からも参加して、発表がなされている。ただ、持参された東北地方の遺物を実見し、茶菓を食べながらとあることから、畏まった雰囲気ではなかった。記事の末尾には、十一月二十八日に、鳥居と小松の下、会員一同で吉見百穴の見学旅行に行く予定であると伝えている。

このような遠足会は、主に鳥居や小松、大場が引率した。昭和三（一九二八）年十月二十八日の遠足会は、同年九月二十三日から十一月三日まで、鳥居が中国の山東省に出張していることもあって、大場磐雄が引率した。この遠足会の詳細については、『楽石雜筆』や機関誌『上代文化』に記載されており、具体的な行程がわかる。参加者は外来者も含めて約二十人、品川駅に集合し、蒲田にて二名が加わり、下沼部貝塚、亀甲山古墳、上沼部横穴墓群、周辺の古墳群を踏査した。途中下車して、正午ごろには、神奈川県宮前区の影向寺に到着し、さらに一人が合流し、昼食を済ませた。その後、影向寺所蔵の巴瓦や平瓦の完形や破片、年号が解読できる板碑を含む数枚、石斧、木造薬師如来両脇侍像を拝観し、その後、雨の中、同区野川の遺跡を踏査し、綱島にて解散している。影向寺では、当寺の住職とともに、薬師堂の前で記念写真を撮影しており（第三図）、行程の記述とともに、当時の遠足会の様子を伝えている。

このような遠足会以外にも、昭和四（一九二九）年に、現在の東京国立博

物館の見学会や、昭和七（一九三二）年に、千葉県姥山貝塚の発掘調査、同年の映画会などが鳥居の指導の下に行われている。指導は厳しく、大場磐雄の破門の経緯や、中川徳治の叱られた話、樋口清之の標本室設立と『上代文化』発刊、還暦祝賀会に關しての説教など、数々の説話が語られている⁽³⁶⁾。

上代文化研究会の活動以外にも、昭和二（一九二七）年、弁論部の四国地方遊説旅行に、桑原芳樹とともに参加している。その詳細な行程は『氷川学報』に掲載されており、高松市表誠館、琴平町金比羅宮図書館、池田町公会堂（三好市）、脇町小学校、三好高等女学校講堂、穴吹美馬高等女学校、小松島小学校、徳島市千秋閣、富岡村役場、富岡中学校、撫養町鳳鳴館大講堂などで講演している⁽³⁷⁾。

樋口清之が述べているように、鳥居の弟子として、最も勤勉だったのが、中川徳治や丸茂武重であり、昭和六年の満蒙方面（中国東北地方）の発掘調査旅行には、中川徳治が同行している⁽³⁸⁾。この調査旅行や時勢によって、昭和七年、鳥居龍蔵を会長として、本学に満蒙研究会が具体化し、昭和八（一九三三）年、各大学の研究会を牽引し、満蒙視察学生演説会や大講演会を開催している⁽³⁹⁾。昭和八年、服部宇之吉学長や金沢庄三郎博士に殉じて、鳥居は退職していることや、この地域に対する鳥居の研究姿勢から推察すると、本研究会との関係は、この頃までと考えられる。

（二）樋口清之と考古学研究室

大正十（一九二二）年、奈良県立畝傍中学校の生徒であった樋口清之は、県内各地を踏査し、表面採集を行っていた。その頃、鳥居龍蔵の講演を聞き、より一層考古学に興味を抱いた樋口は、鳥居が講義を担当している本学に入学し、有為寮に入居する。有為寮は、桑原芳樹が綱紀肅正のために、修養の場としての宿舍の必要性を考慮して、自宅の隣接地の一軒家を宿舍としたものである（第四図）。

昭和二（一九二七）年に、本学に入学したものの、大学に考古学に關する設備がない事から、本学専務理事であった桑原に樋口が嘆願し、考古学研究

室が設立するに至った⁽⁴⁰⁾。その詳細については、『國學院雜誌』やその他の記事をまとめると次のような経緯になる。

考古学研究室の必要性は、樋口の入学前から訴えられていた。樋口が桑原に懇願したこともあって、大学から本館二階十三号室を与えられ、研究室として内部の設備を整え始めた。愛媛県出身の新田長次郎から陳列ケース購入費として、桑原専務理事に五百円の指摘寄附を受け、当時の愛媛県立大洲高等女学校の校長であった樋口清之のご尊父、樋口清二より不足分を補い、樋口が、内部施設を考案し、標本室が設けられた。新田長次郎は、国産第一号の動力伝動用革ベルト製造や、革をなめすためのタンニン固形エキス製造、「ベニヤ」の登録専売特許などで財を成し、大阪に夜間教育をほどこす私立有隣尋常小学校を創設し、松山高等商業（松山大学）を創立し、樋口清二も良く知る人物であった⁽⁴¹⁾。竪形ケース三・のぞきケース四、四方ガラスケース一、竪のぞき合体ケース一、整理保存木箱（第五図）三十個の設備である。

標本資料は、澤田五郎図書館長の管理の下に置かれ、その内容は、大場磐雄の関東地方縄文土器破片や、宮地直一の信仰関係資料、第一国史研究室藏品や樋口清之所蔵品、鳥居龍蔵や上代文化研究会の学生からの寄贈品、参考標本として土俗品や武田宮御下賜の貝類地質標本などを含んでいた（第六図・第七図）。金鑽宮守から寄贈された重要美術品の武人埴輪もこの頃の寄贈品の一部である（第八図）。昭和四年には、院友の山本直樹から名古屋市北区杉村町薬師裏出土の大甕三、横瓮四、長頸壺一、高坏一、盤一、鉢一、ハソウ二、坏二、黒曜石製石鏃二十三個や、桑原芳樹から祝部坏一、広口坩一、手瓶一、小形長頸坩一、土塔一などが寄贈され、同年五月二十四日の段階で四二五八点、その内容は、縄文・弥生・古墳時代から仏教美術や自然遺物に至るまで、多種多様であった⁽⁴²⁾。

これにより、本学に考古学研究室と標本室が開設され、上代文化研究会が資料整理を協力し、事務所を設置した。樋口が卒業し、国史研究室の助手になると、両室は、国史研究室附属考古学資料室となった（第九図）。考古学

研究室の開設は、『人類学雑誌』でも報じられている。また本学の考古学が充実していることを理由に、大山柏が設立した史前学会の支部も設置され、幹事は、樋口清之、福田耕二郎がなり、共同発掘調査も行なわれた。本学が所蔵する樋口清之関係資料の中には、この時の大山柏の教本が遺されている。

昭和三(一九二八)年には、新校舎落成式に合わせて、一部展覧し、同年十月二十日に整理済みの資料を列品し、一般公開を行なっている。その後も限定的に展覧会を開催したが、大々的に整備され、公開したのは、昭和六(一九三一)年の全国神職大会が開催された五月二〇日である。一般神職の方々が、考古学の意義と使命を理解し、一定の型にはまった文献史的な歴史研究の短所を補いつつ、遺物によって上代文化を研究するように啓発することが目的で展覧し、古墳と貝塚の模型が異彩を放つたと述べられている。

上代文化研究会は、考古学研究室・標本室を中心に、講演会・展覧会・遠足会・拓本講習会などを開催し、大学の考古学・人類学の講義とともに、考古学の教育的な中核として機能していった。上代文化研究会の一員として学んだ人々は、樋口以外にも、本学名誉教授の藤井貞文、水戸史学の福田耕二郎、帝室博物館監査補佐官となった神林淳雄、歴史地理の分野で業績を残した中川徳治、本学教授となった丸茂武重など、考古学の関連諸学の研究者として育ち、多くの研究者を輩出した。

四 校史・学史との比較

考古学に関係する本学の動向をまとめつつ、本学校史や考古学史と比較し、研究・教育的な歴史的展開について、明らかにしたい。このような考古学における校史と学史の画面的な著作として、考古学者個人の回顧録が一般的である。それ以外にも管見の限り、菊池徹夫が早稲田大学についてまとめ、最近では、早稲田大学や学習院大学において、企画展が開催されている。これは、本稿の目的とは異なる視点から書かれたもので、校史資料の量にも違

いがみられる。そこで、斎藤忠の著書から本稿で扱った明治から昭和初期にかけての全般的な考古学の動向について見ていくことにする。

考古学史における明治時代は、考古学が独立した学科として取り扱われ始めた時期で、明治十八年までの初期は、江戸時代の学問伝統を強く残し、明治三二年までの中期は、坪井正一郎や東京人類学会・考古学会が創設し、世間的にも人文学として認められ、末期は、日露戦争の影響や、学問的な論争も生じる時期である。東京帝国大学理学部人類学教室と東京人類学会、東京帝室博物館歴史部、京都帝国大学の3つの主流が大正時代にはあり、東京帝国大学理学部人類学教室中心の学風、江戸時代からの伝統的風潮から脱する時期であるとされる。昭和前期は、旧来の学会に、さらに、史前学会や東京考古学会などの新たな学会が創設され、各地域の考古学を主とする学会も設立され、各機関誌も発刊された。現在に続く組織が整った時期でもある。

では、校史について『國學院大學百年史』の明治時代から昭和初期までの構成を抜粋すると、第一篇皇典講究所の創立期、第二篇國學院の創設期、第三篇本所本学の苦難期、第四篇専門学校時代、第五篇大学令大学昇格期、第六篇本所本学の拡充期とされている。各篇の詳細については、本著に述べられていることから割愛するが、いくつかの画期が見られる。

考古学史や校史と、本学の考古学の展開を比較すると、明治時代の第一期、明治終わりから大正時代前期までの第二期、大正時代後期から昭和初期までの第三期を設定し、まとめることができる。

第一期は、國學院の創設期の講師で、皇典講究所と関係し、学問的には江戸時代の伝統を強く残している黒川真頼や、教職免許資格の取得により招聘され、明治末期から生じた論争の核であった喜田貞吉がいる。

第二期は、専門学校令の公布を受け、私立國學院大學と改称し、大学部を設置し、人類学・考古学の講座開設により招聘された東京帝国大学理学部人類学教室と東京人類学会の坪井正一郎や松村瞭、東京帝室博物館歴史部の高橋健自がいた。

第三期は、大学令による大学となり、國學院大學學則にも考古学・人類学が記載され、本学初の人類学・考古学に関する教授職を委嘱された鳥居龍蔵がおり、上代文化研究会や考古学研究室・標本室が創設された。また、國學院大學附屬神職部（のちに、神道部と改称）規程にも学科課程の一つとして、考古学が記載され、昭和四年度に大場磐雄が担当した。上代文化研究会から輩出された研究者により、本学の考古学的な特徴が示されることから、重要な画期と言える。

現在、上代文化研究会は、國學院大學考古学会として、標本室は、陳列室を経て、考古学資料館と成っている。

第二期以降、坪井正五郎や松村瞭、鳥居龍蔵など東京帝国大学人類学教室が本学考古学に強く影響している。とくに、第三期は、人類学教室においても、様々な事が起こった時期でもある。坪井の死後、翌年に学位を取得した鳥居は、大正十一年に二代目の人類学教室主任となる。しかし、樋口清之に「考古学は歩けオロヂー」だと教えるほど、フィールドワークを中心に研究活動を行なった鳥居は、調査によって留守が続き、なおかつ、本学の教授を兼務することで、学内的不満も高まった。しばらくすると、松村瞭の学位論文が発端となり、大正十三年に鳥居が東京帝国大学を辞職し、大正十四年に石田収蔵、小松真一は国鉄、山内清男は、東北大学解剖学教室副手にと、続々と人類学教室から移った。大正十一年に、人類学選科生になった甲野勇によると、当時は、文化人類学・先史学を鳥居龍蔵、形質人類学・人種学を松村瞭、樺太の人種・文化を石田収蔵から学んだとある。つまり、東京帝国大学人類学教室の中心的な存在の鳥居が着任し、人類学教室の助手であった小野真一が、学生組織である上代文化研究会の幹事長となったことで、当時の人類学教室の文化人類学・先史学の流れを着実に受け継いだといえるだろう。しかし、大場磐雄が本学に入学した大正七年度から大正十年度は、第二期と第三期の間にあたり、考古学や人類学の講座がなく、大場自ら学会やその他の活動に参加し、鳥居龍蔵や柴田常恵から考古学を学んだ存在であることか

ら、第三期の学生とは、一線を画す存在であることも、その後の大場の学問形成に影響を及ぼしていると考えられる。

五 おわりに

明治時代から昭和初期までの、國學院大學の考古学についてまとめ、校史・学史との比較によって、その流れや特徴を述べた。

国学的な伝統の中で、黒川真頼の皇典講究所講演において考古学の遺跡や遺物が扱われたが、江戸時代の伝統的枠組みの範疇であった。その後、近代的考古学が独立した学問として一般的な認識がなされるようになった初期の段階で、坪井や高橋といった一流の講師が人類学や考古学を担当し、その両講座を鳥居龍蔵が担当したことにより、現在にも直接繋がる学内組織が確立した。まさに、本学考古学の基盤を形成する強い影響を与えている。大正十三年から大正十四年の本学における鳥居の講義内容が掲載された『人類学上より見たる我が上代の文化(1)』は、精神を物質の両文化を明らかにするため、宗教・民族心理などまで含めており、本学の学問の流れに繋がっている。

講座による教育、資料の収集や調査研究の技術を学ぶ場として上代文化研究会、研究公開の場としての標本室が設置され、大学構内に考古学に関する三つの教育要素が昭和初期には組織化されていた。その後、上代文化研究会は、内外問わず、多くの研究者を招き、講演会や実演会を行って、講義では補いきれない様々な役割を果たしてゆく。この役割は、國學院大學の考古学関係組織が、様々な場面で引き継いでいるといえる。当時、学内で学んだ考古学を学生が、夏期に帰郷し、各地域で考古学調査を行ない、地域の歴史を明らかにしていった。その成果はすぐに本学で話され、様々な繋がりによって学界へと広まっていく。こういった構図は、昭和初期以後、戦後の高度経済成長期に各地で考古学的な機関が組織され、運営がなされても、なお、基礎的な土台であった。

現在、本学の学術資料館考古学資料館部門や、考古学研究室などにおいて、これら蓄積された学術資産の整理を着々と進めているところである。昨年、本学伝統文化リサーチセンター再整理した真福寺貝塚のもこの一環である。⁽⁹⁾このような基礎情報の整理は、本学考古学の教育・社会的役割・地域貢献を述べる上で重要であり、整備が待たれるところである。

また、藤原宮跡の発掘などに貢献した黒板勝美は、本学の講師として教壇に立っていた。森本六爾や大山柏は、上代文化研究会を介して、多くの学生と触れ合った。紋章学の沼田頼輔も本学で講演などを行っている。これらの方々については、別稿で扱いたい。

本稿が、本学校史や考古学史の一助となり、考古学の講座が開設されて百年の節目を迎え、新たな百年を刻む参考になれば幸いである。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、左記の機関・方々よりご指導・ご協力を賜った。末筆ながら感謝申し上げたい。(敬称略順不同)

内川隆志・加藤里美・深澤太郎・新原佑典・中村耕作・杉山林継・杉山章子・渡邊卓・戸波裕之・齋藤しおり・宮川博司・吉田恵二・松井圭太・國學院大學学術資料館・考古学研究室・考古学会・図書館・影向寺

註

- (1) 國學院大學伝統文化リサーチセンター「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクトト 二〇一一『若木ヶ丘の歩けオロヂー』國學院大學伝統文化リサーチセンター(東京)
- (2) 樋口清之 一九五三「本学の考古学」『若木考古』第二一〇号、國學院大學考古学会(東京)
- (3) 関孝一編 一九六一「歴代考古学及び関連講座担当表」『若木考古』第六〇号、國學院大學考古学会(東京)

- (4) 高橋建自 一九一一『鏡と剣と玉』富山房(東京)
- (5) 益井邦夫 二〇〇九「校史資料の調査と研究」『國學院大學伝統文化リサーチセンター紀要』第一号、國學院大學伝統文化リサーチセンター(東京)・勝山吉章 二〇一〇「自己点検・自己評価としての自校史」『福岡大学研究部論集A 人文科学編』一〇巻一、福岡大学(福岡)
- (6) 齋藤忠 一九九〇『日本考古学史の展開』日本考古学研究会、学生社(東京)
- (7) 國學院大學校史資料課 二〇〇三『國學院大學百二十年小史』國學院大學(東京)・國學院大學校史資料課編 一九九四『國學院大學百年史(上巻)』國學院大學(東京)
- (8) 高塩博 一九九八「黒川真頼」『國學院黎明期の群像』國學院大學日本文化研究所(東京)
- (9) 一九〇六「黒川博士を悼む」『國學院雜誌』第十二卷第十号、國學院大學(東京)
- (10) 黒川真頼 一八九三「古代武器説」『皇典講究所講演』九五、皇典講究所(東京)・一八九四「穴居説」『皇典講究所講演』一三七、皇典講究所(東京)・一八九四「穴居説(承前)」『皇典講究所講演』一三八、皇典講究所(東京)
- (11) 齋藤忠 一九七四「日本考古学史」吉川弘文館(東京)
- (12) 坪井正五郎 一八八八「本邦石器時代の遺物遺跡は何者の手に成たか」『東京人類学会雜誌』第三卷第三一、東京人類学会(東京)
- (13) 佐藤利文 一九〇六「黒川真頼先生言行録」『國學院雜誌』第十二卷第十号、國學院大學(東京)・一九〇六「黒川真頼先生言行録(其二)」『國學院雜誌』第十二卷第十一号、國學院大學(東京)・一九〇六「黒川真頼先生言行録(承前)」『國學院雜誌』第十二卷第十二号、國學院大學(東京)
- (14) 喜田貞吉 一九八二「六十年の回顧・日記」喜田貞吉著作集第十四卷、平凡社(東京)
- (15) 一九一〇「國學院大學近況」『國學院雜誌』第十六卷第十号、國學院大學(東京)
- (16) 註11と同じ。
- (17) 一九一〇「東京人類学雜誌」二九一、東京人類学会(東京)・坪井正五郎 一九一〇「最近一年間事業報告(承前)」『東京人類学雜誌』東京人類学会(東京)
- (18) 一九一三「坪井博士の訃」『國學院雜誌』第十九卷第六号、國學院大學(東京)・一九一三「坪井博士の葬儀」『國學院雜誌』第十九卷第七号、國學院大學(東京)
- (19) 一九一三「本学年の各学科及担当講師」『國學院雜誌』第十九卷第九号、國學院大學(東京)

- 院大學(東京)
- (20) 山口敏 二〇〇五「第四卷『鳥居龍藏・浜田耕作・松村瞭(一)』解説」『日本人類学文献選集近代篇』第四卷、クレス出版(東京)
- (21) 一九一一「國學院大學近況」『國學院雜誌』第十七卷第五号、國學院大學(東京)
- (22) 梅原末治 一九七三『考古学六十年』平凡社(東京)
- (23) 樋口清之 一九七九『樋口清之略歴』『樋口清之博士略歴并著作論文目録』、樋口清之博士古稀記念事業実行委員会(東京)
- (24) 照本亶 一九三〇「大正初期の母校を顧みて」『学窓回顧録』、國學院大學院友会(東京)
- (25) 大場磐雄 一九七五『大場磐雄著作集』第六卷、雄山閣(東京)
- (26) 一九二二「学部教員会議」『國學院雜誌』第二八卷第四号、國學院大學(東京)
- (27) 鳥居龍藏 一九五三『ある老学徒の手記』朝日新聞社(東京)
- (28) 一九二二「國學院大學に於ける人類学」『人類学雜誌』第三七卷第四号、人類学会(東京)
- (29) 小松真一 一九二二「國學院大學に於ける鳥居博士の講義」『人類学雜誌』第三八卷第六号、人類学会(東京)
- (30) 一九二六「上代文化研究会発会式」『國學院雜誌』第三三卷第三号附録、國學院大學(東京)
- (31) 鳥居龍藏 一九一五「上代文化研究法に就いて」『上代文化』第二号、上代文化研究会(東京)
- (32) 神社新報企画・葦津事務所編 一九九二『隨處楽園』笠間稲荷神社社務所(茨城)
- (33) 一九二六「國學院大學の上代文化研究会」『武蔵野』第八卷第一号、武蔵野会(東京)
- (34) 一九二六「國大上代文化研究会例会」『國學院雜誌』第三二卷第十二号、國學院大學(東京)
- (35) 註25と同じ。上代文化研究会 一九一四『上代文化研究会パンフレット』第一号、國學院大學上代文化研究会(東京)・國學院大學日本文化研究所学術フロンティア推進事業 「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」プロジェクト編 二〇〇五『國學院大學学術フロンティア構想大場磐雄博士写真資料目録 I』國學院大學日本文化研究所(東京)
- (36) 大場磐雄 一九五三「鳥居博士と私」『國學院大學新聞』第一八一号、國學院大學考古学会(東京)・樋口清之 一九五三「鳥居先生の思い出」『若木考古』第一八・一九号、國學院大學考古学会(東京)・樋口清之 一九五一「恩師鳥居龍藏博士」『若木考古』第五号、國學院大學考古学会(東京)・中川徳治 一九五一「鳥居先生に叱られた話」『若木考古』第五号、國學院大學考古学会(東京)
- (37) 國學院大學新聞学会 一九二七『氷川学報』第四号
- (38) 樋口清之 一九五一「恩師鳥居龍藏博士」『若木考古』第五号、國學院大學考古学会(東京)
- (39) 國學院大學新聞学会 一九三一『國學院大學新聞』第三九号、國學院大學新聞学会(東京)
- (40) 國學院大學新聞学会一九三三『國學院大學新聞』第五十号・第五二号、國學院大學新聞学会(東京)
- (41) 藤井貞文・菟田俊彦編 一九七六『桑原芳樹翁伝』國學院大學内「桑原芳樹翁伝」刊行会(東京)
- (42) 註23と同じ。
- (43) 西尾典祐 一九九六『至誠 評伝・新田長次郎』中日出版社(愛知)・青山淳平 二〇〇九『明治の空―至誠の人 新田長次郎―』燃焼社(大阪)
- (44) 一九二八「考古学研究室開設」『國學院雜誌』第三四卷第十一号、國學院大學(東京)・國學院大學新聞学会 一九二八『氷川学報』第一六号、國學院大學新聞学会(東京)・加藤有次 一九六六『考古学資料館の今昔』『若木考古』第八十号、國學院大學考古学会(東京)・関孝一編 一九六一「考古学資料室の歩み」『若木考古』第六十号、國學院大學考古学会(東京)
- (45) 山本直樹の寄贈品は、名古屋市東区杉村町と記されているが、北区の間違いと
思われ、資料の一部は、現在、展示されている。これら以外にも、藤原俊秀氏か
ら茨城県東茨城郡飯富村(水戸市)飯富出土の馬具(轡)一組、鉄鍬五個、鉄鏝
二個、鉄刀三振が寄贈されている。國學院大學上代文化研究会 一九二九『上代
文化』第二号、上代文化研究会(東京)・一九二九「考古学室消息」『國學院雜誌』
第三五卷第三号、國學院大學(東京)
- (46) 一九三二「研究室主任」『國學院雜誌』第三八卷第五号、國學院大學(東京)
- (47) 上代文化研究会 一九三二『上代文化』第七号、上代文化研究会(東京)
- (48) 一九二九「國學院大學支部の設置」『史前学雜誌』第一卷第五号、史前学会(東京)
- (49) 上代文化研究会 一九一四『上代文化研究会パンフレット』第一号、上代文化研究会(東京)
- (50) 林靖 一九三一「考古学標本室の公開」『上代文化研究会』第六号、上代文化研究会(東京)

(51) 菊池徹夫 一九八四「早稲田と考古学」『早稲田学報』九四六号、早稲田大学(東京)

(52) 早稲田大学会津八一記念博物館 二〇〇九「早稲田考古学 その足跡と展望」早稲田大学会津八一記念博物館(東京)・学習院大学史料館 二〇一〇『目白の森とその昔 学習院と考古学』学習院大学史料館(東京)

(53) 日本考古学における大学教育の役割について考えるときに、各大学における考古学教育の展開を明確にする作業は今後必要になるかもしれない。

(54) 註11と同じ。

(55) 樋口清之 一九五〇「あるけオロヂー」『国大考古学会月報』第一号、國學院大學考古学会(東京)

(56) 守屋幸一 二〇一一「石田収蔵旧蔵絵はがきと人類学教室の人びと」『明治・大正期の人類学・考古学者伝』板橋区立郷土資料館(東京)

(57) 八幡一郎 一九七一「東大人類学科ころの甲野氏」『日本考古学選集20』集報二、築地書館(東京)

(58) 鳥居龍蔵 一九二五『人類学上より見たる我が上代の文化(1)』叢文閣(東京)

(59) 國學院大學伝統文化リサーチセンター・学術資料館 二〇一一「埼玉県さいたま市真福寺貝塚出土資料」『國學院大學学術資料館考古学資料館紀要』第二七輯、國學院大學学術資料館考古学資料館(東京)

挿図

第一図 高橋建自 一九一一『鏡と剣と玉』富山房(東京)

第二図 黒川真頼 一八九三「古代武器説」『皇典講究所講演』九五、皇典講究所(東京)

第三図 國學院大學日本文化編 二〇〇五『大場磐雄博士写真資料目録』I、國學院大學日本文化研究所(東京)

第四図 樋口清之博士写真資料(初出)

第五図 國學院大學学術資料館考古学資料館所蔵(展示資料)

第六図 樋口清之博士写真資料・「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクト 二〇一一「伝統文化リサーチセンター資料館」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第三号(第一分冊)、國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター(東京)

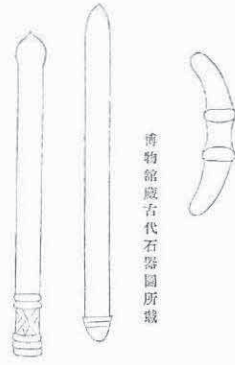
第七図 樋口清之博士写真資料(初出)

第八図右 國學院大學考古学資料室 一九三三『考古学資料集』第一輯、上代文化研究会(東京)

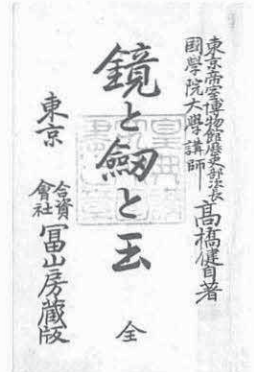
第九図 樋口清之博士写真資料・「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクト 二〇一一「伝統文化リサーチセンター資料館」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第三号(第一分冊)、國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター(東京)



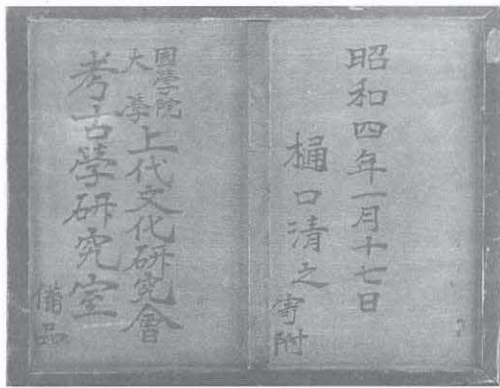
第3図 上代文化研究会の遠足会
影向寺での集合写真 (ob0605)



第2図 黒川真頼「古代石器考」
掲載の石器



第1図 高橋健自著
『鏡と剣と玉』



第5図 整理保存木箱の裏書



第4図 有為寮



第7図 昭和初期の標本室



第6図 学生時代の樋口清之と標本室



第9図 昭和10年頃の考古学資料室



第8図 武人埴輪 埼玉県熊谷市出土
(重要美術品)